

宮城県文化財調査報告書第44集

砂山横穴古墳群調査報告書

昭和51年 3月

宮城県教育委員会
宮城県企業局

序

仙台新港の建設により仙台市、多賀城市、七ヶ浜町の新港に隣接する地域は著しい変貌をとげ、これに伴い各種の整備事業も積極的に進められてまいりました。七ヶ浜町湊浜地区も新港周辺の整備計画により住宅の団体移転が行なわれ、これに伴う造成工事によってこの砂山横穴古墳群が発見され緊急発掘調査を実施したものであります。

この調査では、13基の凝灰岩に掘られた横穴古墳を検出し、供献用の土師器、須恵器をはじめ、副葬されたと見られる直刀、刀子、ガラス製小玉等の貴重な遺物を発見するとともに、横穴古墳造営に関する新しい資料を得ることができました。

報告書の刊行にあたり、関係各位から寄せられた御協力に対し感謝を申し上げますとともに、この報告書が広く活用されることを願い、今後とも文化財の保護により一層の御協力をお願いする次第です。

昭和51年3月

宮城県教育委員会

教育長 津軽芳三郎

目 次

序	宮城県教育委員会教育長 津軽芳三郎
例 言	
I 調査に至る経過	1
II 横穴古墳群の位置と環境	2
III 調 査	4
1 各横穴古墳の状況	4
2 横穴古墳の配列	9
3 出土遺物	10
IV 考 察	14
V まとめ	18
図 版	19

例　　言

1. 遺跡所在地 宮城郡七ヶ浜町湊浜字樹形図1-1
2. 調査期日 昭和49年9月12日～9月26日
3. 調査主体者 宮城県教育委員会
宮城県企業局
4. 調査担当者 宮城県教育庁文化財保護課
5. 発掘面積 約400m²
6. 発堀基数 13基
7. 遺跡記号 D J
8. 調査協力機関 七ヶ浜町教育委員会
9. 横穴古墳群の名称について

この横穴古墳群は字樹形図1-1に所在するので、通常は「樹形団横穴古墳群」とすべきであるが、昭和38年にこの古墳群に隣接する字樹形団7周辺で横穴古墳が発見され、その調査が実施されたが、その際「樹形団古墳群」と命名しており、今回とりあげた古墳群と直接連続していないし、名称上の混乱をさけるためこの古墳群の所在する地域は、「砂山」で通用するので「砂山横穴古墳群」と命名した。

10. 遺構及び遺物について

遺構は崖崩れ防止工事により現存していない。遺物は東北歴史資料館に保管されている。

11. 本書の執筆及び編集は文化財保護課、斎藤良治が担当した。なお遺物の写真撮影、資料の解釈等については、東北歴史資料館、多賀城跡調査研究所の職員の御協力御教授をいただいた。

I 調査に至る経過

仙台新港建設に伴ない七ヶ浜町湊浜地区の集団移転のため、昭和48年2月、七ヶ浜町諂地区土地区画整理組合が設立され、土地区画整理事業を同組合及び宮城県企業局が実施してきた。この工事は昭和47年より開始され、同51年3月完成を目標に進められてきたが、この区画事業地内の西側は、比高差約10m前後の崖面になっており雜木及び松柏類が植生しているところで崖崩れの危険があった。そのため昭和49年9月5日よりこの地内で急崖の凝灰岩に薄くへばりついている表土をはぎ、崖面の調整をし、最後にセメントを吹きつける崖崩れ防止工事を実施していた。

9月11日、この工事中、崖面の中段に横穴古墳が発見されたとの連絡を地元の七ヶ浜町教育委員会より受けた。工事中でもあるため直ちに文化財保護課氏家和典調査第1係長が現場へ急行し、削平した崖の中段に3基の横穴古墳が開口しているのを確認した。状況より判断して工事予定地内にも更に横穴古墳の存在が推定できること等より、関係者に工事を一時中止する旨要請し、帰庁した。

当日の午後、現地調査をした氏家係長の報告をもとにこの工事の主管課、企業局用地造成課と遺跡の保護について協議した。現場の状況より判断して現状のまま保存することは崖崩れの危険もあるため不可能であり、特に崖下の住宅と2~3mの幅しかなく、その緊急性を勘案して調査班を急速編成してこの調査に当ることにした。

以上の経過をたどり9月12日より9月26日まで延べ6日間調査を実施し完了した。なお、調査最終日に一般の方々を対象として、遺構及び遺物を公開し、その成果について現地説明会を開催した。

II 横穴古墳群の位置と環境

1. 位置と地理的環境

当横穴古墳群は、多賀城市との境界に近く多賀城市大代より七ヶ浜町菖蒲田へ行く県道と仙台新港北岸の湊浜へ行く道路との分岐点に接した丘陵南端に位置している。ここからはおよそ1kmほどで湊浜の海岸、1.5kmほどで海水浴場として有名な菖蒲田の海岸に達する。この丘陵上からは南東方向眼下に仙台新港を見おろすことができ、南及び南西方向は仙台平野を越して奥羽山脈の山並みが望見できる。

この横穴古墳群の造営されている丘陵は、地形区分では陸前丘陵中の松島丘陵に属している⁽¹⁾。この松島丘陵は長町～利府線の東側に位置する小丘陵で、富山、姉取山、大鷹森などの突出部を除いて40～100m前後の高度をもち、西部の富谷丘陵と比べて一段低い。20～40m附近には海蝕台地が分布し、松島海岸の複雑な海岸線を形成している。この丘陵は新第3紀に形成された砂岩、礫岩、凝灰岩質砂岩よりなり、この横穴古墳群もこの丘陵の崖面に露出している凝灰岩質砂岩をくり貫き造営したものである。

丘陵の南は仙台平野の北東端に当たり、平野と丘陵の接点に横穴古墳群が営まれたものである。仙台平野の北東部は海岸に平行した3～4列の砂丘浜堤群と後背湿地からなり、小高い砂地盤の地帶は浅層地下水に恵まれた部落発達の適地となっている。これに対して後背湿地は典型的な軟弱地盤になっている。

2. 歴史的環境

この横穴古墳群は、特別史跡、多賀城の内城より東南東方向に直線にして約5.5kmの位置にあり、周辺の丘陵地及び海岸浜堤上には数多くの横穴古墳群及び土師器、須恵器を出土する集落跡が知られている。^{(2) (3) (4)} 丘陵上には多賀城市大代、七ヶ浜町樹形団、薬師の各横穴古墳群が隣接して所在し、いずれも当横穴古墳群とほぼ同様の地理的環境にある。これらの横穴古墳群の中で樹形団横穴古墳群は氏家和典氏により緊急調査が実施された。⁽⁵⁾ この報告によると、横穴古墳群は奈良時代直前に開始され、その終末は平安時代中期前後と推定している。大代・薬師横穴古墳群については正式な調査が行なわれていない。⁽⁶⁾

土師器、須恵器を出土する集落遺跡は、海岸線にそって発達した浜堤上にあり、東原、西原、元船場、新田前等を数えることができる。この付近は昭和39年仙台湾地区新産業都市の指定を受け、昭和46年には仙台新港が開港し、その後背地は工業団地となり地域的に大きく変貌をとげている。これらの遺跡のうち、新田前遺跡所在地周辺に仙塩流域下水道終末処理場が建設されることになり、昭和49年に発掘調査を実施した。⁽⁷⁾ その結果、この遺跡は浜堤上に形成された

奈良～平安時代にかけての集落跡の一部であることが判明したが、集落の中心よりはずれ、土師器、須恵器若干が出土し、遺構としては井戸を1基検出している。これらの遺跡群と横穴古墳群との関連を考える上に重要である。

註

1. 経済企画庁総合開発局「土地分類図(宮城県)」昭47
2. 宮城県教育委員会「宮城県文化財調査報告書第28集 宮城県遺跡地名表」昭48
3. 丹治英一「宮城県七ヶ浜町の遺跡」昭44
4. 七ヶ浜町役場「七ヶ浜町誌」昭42
5. 氏家和典「宮城県文化財調査報告書第12集 樹形圓横穴古墳調査概報」昭38
6. 加藤孝 塩釜市史III「考古学上より見た塩釜周辺の遺跡」昭35
・大代横穴古墳群「…いざれも蒲鉾型天井の玄室を有するもので、糸切底の土器片(表杉入形式)、叩き出し文の青海波ある須恵器片が出土した。」
・湊浜横穴古墳群(菫師横穴古墳と推定)「…14基あり構造上の細部は不明、戦争中に擴張され、その原形いざれも不明。」

III 調査

1 各横穴古墳の状況

1号墳

羨道及び玄室は工事によって削平され玄室のみが残存している横穴古墳である。玄室の平面形はほぼ正方形に近く、立面形は変形アーチ形で施設は作られていない。玄室内は比較的風化が進行せず5~6cm幅の縦位のノミ痕が認められた。堆積土は茶褐色で粘性に富み、玄門近くで約1cm内外堆積し、奥壁付近ではわずかに認められる程度である。副葬品の出土はなかった。

2号墳

工事によって羨道の一部が若平削平されたのみで、幸い玄室、玄門は残存していた。玄室の平面形は長方形で奥に進むにつれて幅はややせまり、左側壁は幾つか曲線を描いて湾曲している。立面形は変形ドーム形である。玄門の立面形はほぼ長方形で、羨道に閉塞石が置かれ、閉塞溝が掘られている。閉塞石は河原石と凝灰岩塊を使用し、羨道前面に崩壊したような状況で出土している。玄室、玄門及び羨道に堆積土が見られたが、羨道より流入した形で羨道では厚く、玄室奥に進むにつれて次第に薄くなり、玄室奥壁付近では1cm以下の堆積である。副葬品の出土はなかった。

3号墳

3号墳から13号墳までは工事によって破壊されることなく、地表面のくぼみやボーリングによって横穴古墳の所在を確認し、調査することができた。

3号墳は玄室天井の約半分近くまで破壊している。玄室、玄門、羨道の区別がつきにくいわゆる袋状の不正形の構造を持った横穴古墳である。玄室は奥行が265cmとこの横穴古墳群中最も長く、平面形は中軸線に対して左右非対称で「袋状」を呈し、奥壁に進むにつれて次第にその幅を増している。玄室中央、右側壁添いに排水溝がある。立面形は変形アーチ状を呈している。玄門は痕跡的で極めて短い。羨道は玄門より幾分か広がりを持っている。羨道は段がついて玄門より約35cmほど下がっている。この横穴古墳は不正形で、掘削も極めて粗雑な感じを受ける。奥壁及び奥壁天井部付近に幅3cmほどのノミ痕が見られた。副葬品の出土はなかった。

4号墳

玄室はほぼ正方形の平面形をもち、立面形は変形アーチ形である。玄室の高さは78cmでこの横穴古墳群の中では低い。玄門の平面形は長方形で、立面形は左右の壁の上部は崩壊しているので不明であるが、床面よりの立ち上りの状況より左右にふくらみを持つ長方形であろう。羨

遺には閉塞溝が玄門に接して掘られており、その上に凝灰岩塊の閉塞石が置かれ、その下部は閉塞溝の中に入り込んでいた。副葬品の出土はなかった。

5号墳

玄室は奥壁及び左側壁がやや湾曲しており、奥の辺がやや長い長方形の平面形をもつている。立面形は天井部が大きく崩落しているため測定し得なかつたが、両側壁の立ち上りより変形したドーム形をしていたものと思われる。玄室中央より玄門を通り羨道の一部に断面がU字形の排水溝が1本掘られている。玄室の床面は中央部が幾分くぼんでいる。玄門は比較的短く左右側壁の床面より約20cmの高さのところに門穴が作られている。立面形は崩落が著しく不明であるが立ち上りより推定して長方形と思われる。羨道には川原石と凝灰岩塊を使用して閉塞石が置かれている。閉塞溝は中央を縦に走る排水溝を切って作られている。この閉塞溝を境にして羨道は玄門の面より約10cmほど下がって段がついている。

副葬品は玄室より直刀、羨道より土師器壺、須恵器壺、蓋がそれぞれ出土している。直刀は玄室の右側壁、玄門近く床面に接して束を手前にして出土した。須恵器壺は閉塞石の上に伏せた状況で出土したが、この壺の底部に「万」の字の墨書のあることが、整理の段階で発見されているものである。須恵器蓋と土師器は閉塞石を埋めた土の中より床面より浮いた状況で出土したが、おそらく横穴古墳の上部より流入した土砂によって移動したものであろうと推測している。

6号墳

玄室は四周が外側にやや湾曲した正方形に近い平面形をもち、中央部に3本の短くて深い排水溝がある。この排水溝とは別に玄門近くより羨道1本の排水溝が作られている。立面形は変形アーチ形であるが、奥壁一部は崩落している。左右の側壁の一部天井に近く幅約10cm内外のノミ痕が縦位に認められた。玄門は平面形、立面形ともに長方形で、玄室より連続している幅約20cm、深さ約10cm内外の比較的広い排水溝が中央部を走っている。羨道には閉塞溝が掘られこの付近に閉塞石が置かれている。閉塞溝は玄室より延びた中央部の排水溝を切つており羨道はここより段がついて下がっている。閉塞石はほとんどが河原石で、閉塞溝の上に積み重ねられ、石組みは崩壊しているが、床面に接した一部は閉塞溝の中に食い込んだ形で見られた。玄室内には玄門より流入したと考えられる堆積土が認められた。

副葬品はこの横穴古墳群中最も豊富で、刀子、土師器壺、高壺、須恵器長頸瓶、平版が出土している。副葬品はほとんど閉塞石の前面、羨道床面上の堆積土中より出土した。土師器壺は2カ所より出土し、1組は上向きに3枚重ねて置かれ、更にもう一組は2枚重ねて伏せて置か

れていた。土師器高坏は崩落した土中の表面近くより台部が出土しているが風化が著しい。須恵器は平版と長頸瓶が閉塞石の前方に置かれていた。平瓶の口縁部が閉塞石の一個に接しており、その個所の小破片が約10cmほど離れた所より発見され、また長頸瓶の頸の部分は体部より1mほど離れて出土している。このことから考えて、閉塞石の前に置かれたこれらの土器が閉塞石の崩落か急激な土砂の流入等によって破損したものであろう。刀子は閉塞石の間より出土した。

7号 墓

玄室は四隅が丸味をもつて湾曲し、ほぼ円形に近い平面形である。排水溝は奥壁にそって4分の1周ほどめぐり、これに接続して中央より玄門まで中央部に排水溝が延びている。立面形は変形ドーム形である。右側壁、玄門近くに幅約9cmほどのノミ痕が一部分に認められる。玄門は比較的よく残存しており、平面は長方形で立面もいくらかふくらみを持っている。羨道に閉塞石が置かれ、河原石が大部分であるが中に数個の凝灰岩塊が入っている。閉塞溝はなく羨道は玄門より約10cmほど下がり一段と低くなっている。玄室内には約10cm内外の堆積土が認められた。第2層は床面に接して粘性に富んだ暗褐色の土層、その上の第1層はやはり粘性に富んだ黄褐色土層の堆積が見られた。

副葬品は長頸瓶が2個、閉塞石の前面に転倒した形で発見され、閉塞石の石組の崩壊により転倒したものであろう。このほか著しく風化した土師器の高坏破片が羨道に崩落した茶褐色の堆積土の中より出土している。

8号 墓

玄室、玄門、羨道の区別が不明瞭な不正形のいわゆる袋状の平面形をもつ横穴古墳である。立面形は一応アーチ状をなしているが、玄門が崩落しているので不明である。玄室と玄門の境には閉塞溝があり区別できるが、玄室の広がりはほとんどない。玄室内部は風化が著しく壁面も崩落しており正確には観察できなかったが全般的に極めて粗雑に造作されたものである。副葬品の出土はない。

9号 墓

玄室の平面形はほぼ長方形で四隅は丸味をもつが、各辺は直線で構成され、立面形はドーム形で比較的良好に調整された形態をとどめている。排水溝は玄室の玄門近くより掘られ、羨道まで続いている。玄室と玄門との境に5cmほどの段があり玄門の方が一段低くなっている。副葬品の出土はない。

10号 墓

玄室の平面図は正方形に近く、中央より玄門、羨道まで延びる排水溝があり、玄室の四周にも排水溝をめぐらしたものである。立面形は変形アーチ形である。保存の状況はあまりよくなく、天井、壁面に剥落が見られ、ノミ痕は認められなかつた。玄室内の堆積土は2層に分けることができる。上層の第1層は雨水の浸透によって溶解して堆積したものと考えられ、灰白色の粘性に富んだ土層である。第2層は床面に接し、凝灰岩粒を含む褐色土層である。玄門、羨道の立面形は崩落のため天井部が残存せず不明である。平面形はともに方形である。羨道に閉塞溝があり、左右の側壁に近いところではその掘り込みが明瞭であるが、中央部は玄室より延びる排水溝で切ったためか、又は造作当初より掘り込まなかつたためか不明瞭である。副葬品の出土はなかつた。

11号 墓

この横穴古墳群中でも崩落が著しく、天井は玄室の3分の1程度しか残存せず、床面では玄室のみが確認され、玄門、羨道は残存していなかつた。玄室の平面形は玄室の側壁が直線をもつて末広がりに奥に広がり、奥壁は湾曲しているいわゆる扇形の平面形をもつものである。立面形は残存部より推定してアーチ形をなしていたものであろう。玄室床面に黄褐色の粘性に富んだ堆積土が若干認められた。副葬品として玄室の黄褐色の堆積土中よりガラス製小玉が5点出土した。

12号 墓

玄室、玄門、羨道は平面形や立面形では分類しにくいわゆる袋状を呈する横穴古墳の類形である。玄室の平面形は奥に細長い長万形であるが、右側壁は大きく湾曲しており整形されていない感じを受ける。玄室と玄門の境は平面上で約10cmほど玄門の側壁がせばまるのでここで区別したが、痕跡程度のものである。玄門の羨道との境に閉塞石が置かれ、その左右両壁に閉塞のために掘り込んだ溝がある。排水溝は玄室の中央より羨道まで1本掘られている。副葬品の出土はない。

13号 墓

玄室、玄門、羨道がそれぞれ明確に区画されている平面形を持つ横穴古墳であるが、中軸線を対称の軸として左右を見ると、玄室では右側壁が湾曲して大きくふくらみ、羨道は左側壁の方が広く全体として歪んでいる平面形である。玄室の左側壁のそれぞれの隅は幾分丸味を持っている。辺は直線でかこまれているが、右側壁は大きく湾曲している。玄室中央部より玄門を

横穴古墳の概要

古墳番号	玄室										奥室				後室			
	奥行	幅	高さ	立面部	平面形	床	段	渠	高さ	立面部	床	段	渠	奥行	幅	高さ	施設	
1	200	216	129	アーチ	正方形	なし	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	
2	216	200	111	ドーム	長方形	なし	深	75	91	長方形	なし	不明	不明	160	不明	不明	不明	
3	265	169	114	アーチ	複形	排水溝	36	73	不明	不明	不明	なし	不明	73	不明	不明	不明	
4	173	174	78	アーチ	正方形	なし	46	69	79	長方形	なし	不明	不明	120	116	閉塞石 排水溝	不明	
5	163	164	不明	ドーム	長方形	中央部に 排水溝	45	75	100	長方形	門式上石	排水溝	不明	145	不明	閉塞石 排水溝	不明	
6	200	207	109	アーチ	正方形	中央部に 排水溝	55	93	91	方形	排水溝	不明	不明	140	131	閉塞石 排水溝	不明	
7	158	174	94	ドーム	円形	排水溝	空	82	88	長方形	排水溝	不明	不明	136	不明	閉塞石 排水溝	不明	
8	235	82	80	アーチ	尖形	なし	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	
9	169	155	98	ドーム	長方形	中央部に 排水溝	41	71	98	不明	排水溝	不明	不明	165	不明	排水溝	不明	
10	182	170	94	アーチ	正方形	圓・中央 排水溝	25	67	98	不明	排水溝	不明	不明	115	不明	閉塞石 排水溝	不明	
11	不明	200	不明	アーチ	扇形	なし	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	
12	179	94	68	アーチ	複形	中央部に 排水溝	40	83	82	アーチ	排水溝	不明	不明	97	不明	閉塞石 排水溝	不明	
13	158	235	113	アーチ	長方形	排水溝	68	58	96	長方形	排水溝	不明	不明	127	不明	閉塞石 排水溝	不明	

横穴道の計測値は既存部の高さ、幅である。
既存部とは既存化=

通り羨道まで排水溝があり羨道閉塞溝を切っている。更に玄室の右側壁にそって浅くて幅のせまい排水溝が半周めぐっている。羨道の閉塞溝は中軸線より大きく右側に寄って造られ、この溝の前面に4個の閉塞石が置かれていた。玄室内の一部に縦位のノミ痕が認められた。玄室、玄門に2層の堆積土があり、上層の第1層は褐色のシルト層、下層の第2層は黒褐色の粘性に富んだ土層である。羨道の崩落した黄褐色の土層中より須恵器大甕の体部破片が1点出土している。

2 横穴古墳の配列

この横穴古墳群は比高差約11~12mほどの南西方面に面を持つ崖面の中腹に、横にほぼ一直線上に並んで13基造営されたものである。横穴古墳の広がりは、1号墳から13号墳まで約36mあり、この間に横穴古墳が並び、横穴古墳どうしの重なりはない。高さはこの崖面のほぼ中間に開口し、標高9.5m~11.5mの範囲に分布し、特に10m前後に最も集中している。この中でも12号墳のみは最も高いところに位置している。1~5号墳まではほぼ2mの等間隔であるが、5号墳と6号墳の間は5mほど離れ、6~13号墳までは0.5~3mほどの間隔で配列されているが、6号墳と7号墳、9号墳と10号墳はそれぞれ近く接している。開口の方位はおおよそ南西の方位であるが、最も西に向いている11号墳のS 62° Wと最も北よりに開口している5号墳のS 32° Wでは約30°の開きがある。

横穴古墳の開口方位

古墳番号	方 位	古墳番号	方 位
1号墳	S 41° W	8号墳	S 54.5° W
2号墳	S 43° W	9号墳	S 51° W
3号墳	S 40.5° W	10号墳	S 50° W
4号墳	S 41.5° W	11号墳	S 62° W
5号墳	S 32° W	12号墳	S 52° W
6号墳	S 35° W	13号墳	S 50.5° W
7号墳	S 59° W		

3 出土遺物

(1) 坯

① 土師器坯 (5号墳出土 実測図10-(8) 写真9-(1))

口径15.10cm、器高4.3cmで混入物が殆んどない精選した粘土を使用し、内面が黒色に処理された比較的厚手の有段の坯である。丸底で底部より1.2cmのところに段がつき、口縁部は外反している。底部は器面が荒れていてくわしくはわからないが、一部分にヘラケズリの調整痕がある。体部及び口縁部も器面が荒れているが、ナデによる調整が認められる。内面はヘラミがきによって調整されている。

② 土師器坯 (6号墳出土 実測図10-(9) 写真9-(2))

口径15.5cm、器高4.60mで混入物が殆んどない精選した粘土を使用し、内面が黒色に処理されている有段の坯である。底部は丸底で厚さ1cmと厚く、底面より1.6cmの高さに明瞭な段がつき、この段を境にして上部は薄く、口縁部近くで肥大して外反している。底部は器面が荒れていて調整痕は不明である。段は明瞭で約4mmほどあるが、壁面が荒れているため調整痕は不明である。体部についても器面が剥離していて観察は不能であるが、口唇部は横ナデの調整が認められる。内面は口縁に平行にミガキ痕が認められるが、器面が荒れていて一部分でしか観察できなかつた。

③ 土師器坯 (6号墳出土、実測図10～(10) 写真9～(3))

口径15.9cm、器高3.9cmで混入物を殆んど含まない精選した粘土を使用し、内面は黒色に処理されている。底面より1.4cmのところに段があり、前の2点の坯に比較してやや薄手にできている。特に段の上部は一段と薄くなり、口唇部にいて肥大している。丸底の底面は荒れているがヘラケズリ調整痕が認められる。段は横ナデによって調整されているが、体部より口縁部にかけては器面が荒れていて観察は不能である。内面はヘラミガキ調整をしているが、器面が荒れているためその方向は不明である。

④ 須恵器坯 (5号墳出土、実測図10～(11) 写真9～(5)(6))

口径13.0cm、器高5.0cm、底面径6.2cmで色調は灰色、胎土は精選された粘土で混入物が殆んどない焼成が堅緻な坯である。底部は右回転ヘラ切りで、同方向の回転ヘラケズリ調整痕が底部より高さ1.1cmのところまで認められる。体部及び内面はロクロ成形痕が残り、口唇部は横ナデによって調整されている。

この坯の底部に「万」の墨書が底面のほぼ中央にかすかに認められるが、書体等についての観察は不可能である。

⑤ 須恵器坯 (5号墳出土、実測図10～(12) 写真9～(4))

口径13.8cm、器高4.5cm、底面径8.0cm、色調は灰色、胎土は精選された粘土で混入物を殆

んど含まない焼成が堅緻な坯である。底部は回転ヘラ切りにより切り離され、底部より高さ0.6cmのところまでヘラケズリ調整の後、横ナデによる再調整が行なわれている。体部及び内面はロクロの成形痕が残っており、口唇部は横ナデによる調整が行なわれている。器の内外に黒色の火ダスキーが10数本見られる。

(2) 須恵器平瓶 (6号墳出土、実測図9~(1) 写真10~(1))

口径11.7cm、器高18.90m、底面径14.2cmで把手を有し、口縁部は底面に対して約15°ほど外に傾いており、色調は黒っぽい灰色で、胎土に石英粒を若干含む比較的大型の完形品である。底はヘラケズリの後、更にロクロによるナデ調整が行なわれている。底面より高さ4.9cmのところまでは底部同様ヘラケズリの後ロクロによるナデ調整が行なわれている。この上部把手のところまではロクロ成形の後回転のナデ調整が行なわれている。頸部より口縁部まではロクロの成形痕が比較的顕著に見られる。口唇部は横ナデ調整が行なわれている。把手は断面が6角形で貼布後手持ちのヘラケズリによって調整している。口頸部と体部天井、体部はそれぞれロクロ成形の後貼布し、横ナデによってそれぞれの接合部分を調整している。内面は完形品のためくわしい観察はできないが口頸部にロクロ成形痕が見られる。

(3) 須恵器長頸瓶

① 長頸瓶 (7号墳出土、実測図9~(3) 写真10~(4))

口径10.5cm、器高17.3cm、底部径8.5cm、体部最大径18.5cmで色調は黒灰色、胎土に石英、雲母を含む長頸瓶である。体部の肩は比較的角ばって張っており、体部と頸部の境及び口縁部にそれぞれ日本の鋭角の隆帯をめぐらしている。体部に沈線で区画された幅2.1cmの櫛目文帯がめぐり、高台が付いている。頸部及び体部の肩より下に自然釉が出ている。

高台はロクロ成形をした底部に貼布され、回転による横ナデ調整が施されている。体部下半分底より5.6cmの高さのところまでは左回転によるヘラケズリ調整痕があり、それより上、肩部までと頸部はロクロ成形痕が認められる。肩部と頸部境までは自然釉がかかっているが剥離していく調整痕は不明である。なお頸部、口縁部の隆帯及び口唇部は回転横ナデによる調整をしている。底部中央に 2×2.2 mmの十字の窓印と思われる刻目が入っている。内部は頸部内しか観察できないが、自然釉が剥離しているため調整痕は不明である。

② 長頸瓶 (6号墳出土) 実測図9~(4) 写真10~(2)

口径11.0cm、器高24.9cm、底部径7.60m、体部最大径16.9cmの高台付き長頸瓶である。色調は灰白色を呈し、胎土は精選された粘土を使用している。焼成は堅緻で、体部は丸味を持っている。肩部に幅1mmの沈線がめぐっている。口縁部はゆがみがあり、底面に対し約4°の傾き

がある。高台は高さが約8mmほどでロクロ成形後貼り付けられ、その後回転によるナデ調整が行われている。高台より体部へ約3.4cmほどの高さまで右回転によるヘラケズリ調整が行われており、それより上、口縁部まではロクロ成形のままである。口縁部は回転によるナデ調整が行われている。口縁部、肩部は自然釉が認められ、頸部の1部にも出ている。内部はロクロ成形痕が認められる。

③ 長頸瓶 (7号墳出土 実測図9～(2) 写真10～(3))

口径10.6cm、器高23.2cm、底部径7.3cm、体部最大径15.8cmの高台付きの長頸瓶である。色調は灰白色で胎土には石英粒がわずかに認められる。堅緻な焼成である。自然釉が肩部にわずかに認められる。体部は丸味を持っており、体部中央に幅約3mmほどの浅い沈線を1本めぐらしている。ロクロ成形の底部に高台が約7mmほどの高さに付けられ、回転によるナデ調整が行われている。底部より体部へ3.4cmの高さまで回転ヘラケズリ調整が行われ、それより上、頸部までロクロ成形のままで、頸部にはロクロ成形痕が頗著に残っている。口縁部は回転によるナデ調整が行われ、内部にはロクロ成形痕が見られる。

(4) 須恵器蓋 (5号墳出土実測図10～(13) 写真10～(5))

口径14.0cm、つまみ頂上部まで口縁部よりの高さ5.2cm、つまみ径2.9cmつまみの高さ1.9cm、肩までの立ち上り2.3cmで宝珠状のつまみを持つ外面は黒灰色の自然釉のかかっている蓋である。完成品ではなく、約3分の2が欠損している。肩部よりつまみの境までロクロ成形後回転を利用して3段階に外周より内周に向かって同心円状にケズリ調整を行っている。内部には比較的頗著にロクロ成形痕が残っている。

このほか土師器壺、高壺及び須恵器大甕の破片が出土しているが、小破片であったり風化が著しいため器形等について推定することができないので、ここでは省略する。

(5) ガラス製小玉 5点(11号墳出土)

玉類としては11号墳出土のこのガラス製小玉5点のみである。

- ① ガラス小玉 径4.5mm ややゆがんでおり藍色を呈し半透明(実測図10-(3))
- ② " 径4.0mm 藍色を呈し不透明(実測図10-(4))
- ③ " 径3.8mm 薄い藍色で半透明(実測図10-(5))
- ④ " 径2.8mm 水色で半透明 (実測図10-(6))
- ⑤ " 径4.0mm 紫藍色で不透明、ややゆがんでいる。

約半分ほどが欠損している。(実測図10-(7))

(6) 鉄製品

① 直刀 (5号墳出土 実測図10～(1) 写真11～(1)(3))

造込は刃の断面より平造りと推定され、刃先を失っているが現長73.7cm、刃長56.7cm、刃幅3.2cm、茎長17.0cm、茎幅2.6cmあって比較的大型の直刀である。茎尻に径1.4cmの大きな丸孔があり、手貫緒通しの孔と考えられる。全般に保存状況はあまり良好ではないが、青銅製の柄木の縁金と鞘に鯉口金具が付いている。茎尻の丸孔、柄木の縁金、鯉口、刀身の中央部にそれぞれ柄と鞘の木質部の一部分が残存している。

② 刀子 (6号墳出土 実測図10～(2) 写真11～(1)(2))

追込は刃の断面より見て平造りと思われる。刃先を失っているが全長24.8cm、刃長15.2cm、茎長9.6cmあり、棟区は浅く、刃区は深く、鑄のため正確な観察はできないが、いずれも直角に切っているものと推定される。茎の中心に頭を丸めた鉄目釘が残存している。

IV 考 察

1. 編年問題

東北地方の横穴古墳の編年については、その構造の上から氏家和典氏はくわしい考察を加えておられる。即ち玄室立面形、玄室内棺座、玄室平面形を通して形態変遷をたどり図式化している。本横穴古墳群について見ると、棺座の有するものではなく、玄室立面形においてドーム形、アーチ形に一応は分類できるがいずれも変形しており明確に分類すること自体にやや抵抗を感じるものである。したがってここではこの要素をとり入れること自体に問題があると考え平面形と玄室内の溝についてその関係を考えることにした。

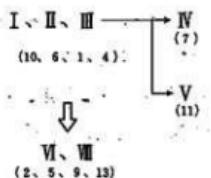
玄室平面形	正方形	···	イ	円形	···	イ'	扇形	···	イ''
	長方形	···	ロ						
	袋 状	···	ハ						
溝	有	···	a	一部	···	a'			
	無	···	b						

この分類によると

I類	イ	-a	(10号墳)
II類	イ	-a'	(6号分)
III類	イ	-b	(1、4号墳)
IV類	イ'	-a'	(7号墳)
V類	イ''	-b	(11号墳)
VI類	ロ	-a'	(5、9、13号墳)
VII類	ロ	-b	(2号墳)

VIII類	ハ	-a'	(3、12号墳)
IX類	ハ	-b	(8号墳)

の分類が考えられ更に書く類の関連は、



と発展するものと考えられる。この分類は形態上のもので、これらの形態が造営年代とどのように関連するのか出土資料では明確にすることはできなかった。

2. 閉塞問題

この横穴古墳群は急傾斜地中腹に位置し、前面に住宅があり、前面はかなりの自然崩落と後世における人為的な削平を受けたものと考えられる。¹⁰氏家和典氏が指摘する基本型としての玄室、玄門、羨道、表門、前庭という構造については、ここでは、羨門、前庭を確認したものがなく、また同氏の「前庭、羨道の崩落後退によって玄室、玄門、羨道という使用形態もあり得る」とする積極的な資料も得ることができなかつた。

玄門に閉塞石、閉塞溝、門穴のいわゆる閉塞施設の見られるものは2、4、5、6、7、10、12、13号墳の8基であるが、二重の閉塞施設は確認できなかつた。

3. 使用年代

年代決定について出土遺物及び横穴古墳の構造より推論したい。

まず須恵器の平版については、6号墳出土のものは県内出土のどの例よりも大型でよく調整され、把手が付いている。¹¹田辺昭三氏はこれを8世紀に位置づけている。須恵器壺は底部をへラ切りでロクロより切り離し、体部の下方より底部にかけて回転ヘラケズリ調整を行い、口縁部はいくらか外反している。¹²岡田茂弘氏、桑原滋郎氏の分類によると第1類aに相当するものと考えられ、7世紀後半より8世紀中葉までの実年代が与えられている。

土師器壺はいずれも有段の内面が黒色に処理された底部が手持ちヘラケズリ調整の行なわれた丸底で、県内においてはこれらの特徴より国分寺下層式に相当するものと思う。

5号墳出土の直刀は茎尻に大きな手貫緒通しの丸孔を有するもので、¹³石井昌国氏によると7世紀後半より8世紀に見られることがあるが、東北地方においても参考にでき得るものと考えられる。

横穴古墳の構造についてみると、形態的には基本型が崩れ、玄室の立面形の簡略化が目立ち、不正形の袋状の平面形を有する横穴古墳が3基ある。¹⁴氏家和典氏は、東北地方の横穴古墳の開始年代を6世紀～7世紀初頭に求められ、7世紀中葉頃まで発展普及をみると解されると述べ平安初期にその終末期を持ってきておられる。本横穴古墳の形態より推定して7世紀後半以降にその年代が求められるべきものであろう。

周辺の横穴古墳の使用年代について概観すると次のとおりである。

仙台市善心寺横穴古墳群	7世紀後半 ⁽¹³⁾
利府町道安寺横穴古墳群	7世紀初頭前後 ⁽¹⁴⁾
矢本町矢本横穴古墳群	7世紀中葉 ⁽¹⁵⁾
七ヶ浜町樹形横穴古墳群	7世紀後半 ⁽¹⁶⁾
塩釜市一本松横穴古墳群	8世紀初頭 ⁽¹⁷⁾
塩釜市清水沢横穴古墳群	8世紀初頭 ⁽¹⁸⁾

以上のような状況より推論して、本横穴古墳群の開始年代は7世紀後半頃に求めることがで
き、少くとも8世紀初頭には確實に使用されていたものと考えられる。

4. 被葬者

⁽¹⁹⁾ 氏家和典氏は、東北においては高塚古墳が横穴古墳に置きかえられた可能性が強いとみて、
後期高塚古墳同様に群集の形態を採用しているので、その被葬者の性格は、後期高塚古墳被葬
者のそれと近似の関係にあることが容易に想像できるとしている。この横穴古墳群においても
副葬品の皆無のもの(1、2、3、4、8、9、10、12号墳)と、副葬品を出土したものの(5、6、7、11、
13号墳)があり、特に5、6、7号墳はこの横穴古墳群中では豊富な副葬品を出土している。5
号墳では直刀が玄室内に副葬され、漢道より「万」の墨書き土器が出土している。6号墳では漢道
より刀子、平版、長顎瓶、坏等が出土し、7号墳よりも高杯、長顎瓶が出土している。また横
穴古墳の構造においても5号墳ではこの古墳群の中で門穴を有する唯一のものである。以上の
ことより考えて、これらのこととは氏族集團内における身分の差を物語るものであろうと考えて
いる。

5. 追葬

横穴古墳には追葬が行なわれる例があるが、ここでは人骨の出土もなく、また玄室内の堆積
土の状況、副葬品の発見場所等から追葬が行なわれたと判断する積極的な資料は得られなかつ
た。

註

7. 氏家和典「日本考古学・上代史論集、東北横穴の問題」伊東信雄教授還暦記念会編、昭49
8. 同上
9. 田辺昭三「陶磁大系4須恵」平凡社版 昭50

10. 岡田茂弘 桑原滋郎「研究紀要I 多賀城周辺における古代壺形土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究所 昭49
11. 石井昌国「新版考古学講座7 出土刀」雄山閣 昭45
12. 註7に同じ
13. 仙台市教育委員会「仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書」昭43
14. 氏家和典「宮城県文化財調査報告書 第12集 樹形図横穴古墳調査概報」昭38
15. 三宅宗議「古代」矢本町史第1巻 昭48
16. 氏家和典「樹形横穴古墳群」宮城県文化財調査報告書第12集 昭38
17. 後藤勝彦「一本松横穴古墳群の研究」塩釜市教育論文第1集 昭30
18. 後藤、高橋、阿部、「塩釜市清水沢横穴古墳群報告書」市文化財調査報告書第1集 昭50
19. 註7に同じ

V まとめ

今回の発掘調査からその成果を次のようにまとめることができる。

1. この横穴古墳群は、北西より南東に一列に並ぶ配列を示すが、地形等の関係で若干方位の異なる群のあること。
2. 内部構造で玄室の平面形によって、正方形、長方形、扇形、円形、不正形袋状を呈するものに分類できること。
3. 玄室の立面形は、アーチ型とドーム形に分類できるが、いずれも変形していること。
4. 使用年代は、7世紀後半より8世紀初頭に考えられること。
5. 副葬品を豊富に出土した横穴古墳と皆無のものがあり、氏族集団内における身分的差を推定できること。

最後に、この横穴古墳群が予想しなかった地点より崖崩れ防止工事中に発見されたということもあって、緊急に調査班を編成して調査し、調査期間中調査員の交代等の問題もあり、十分に意を尽すまでの報告書には至らなかった。

報告書の刊行に際し御協力、御指導をいただいた各位に感謝するとともに、先学の御批判、御指導のほどお願いいたします。

図 版



図1 砂山横穴古墳群位置図

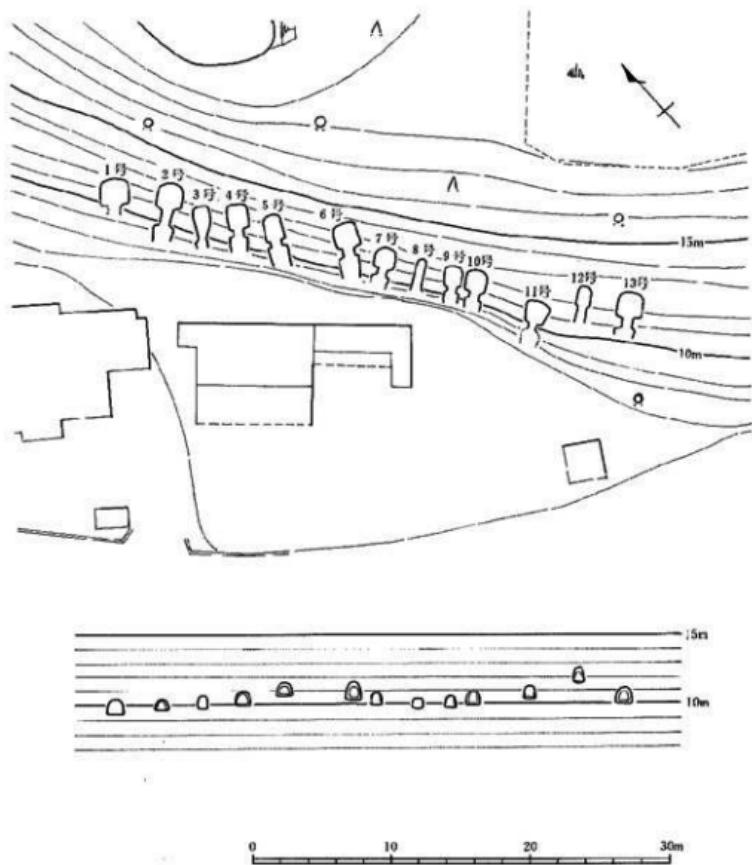
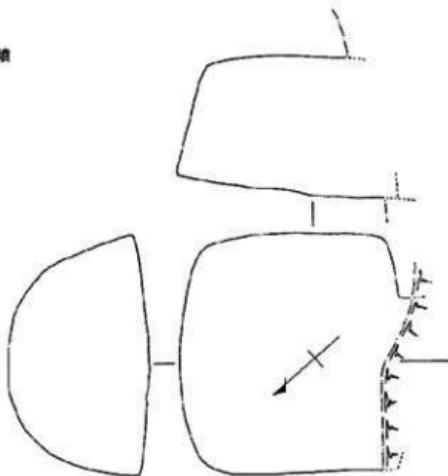
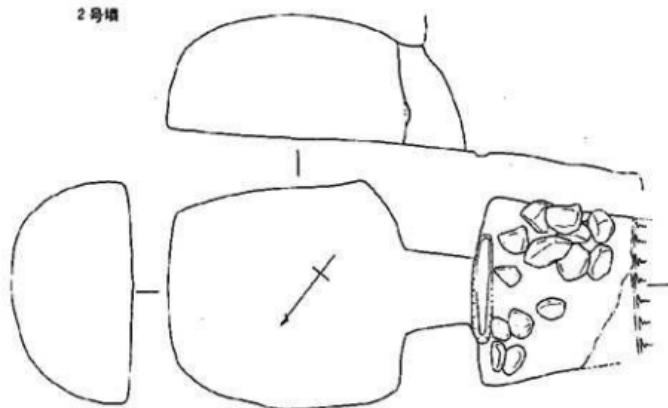


図2 横穴古墳分布状況及び配置図

1号墳



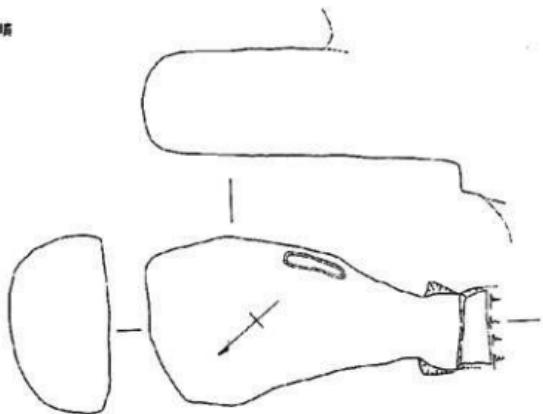
2号墳



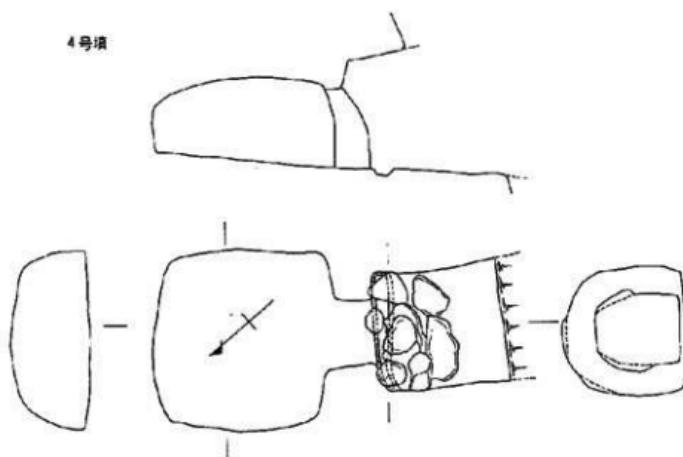
0 1 2 3 m

図3 横穴古墳実測図(その1)

3号墳



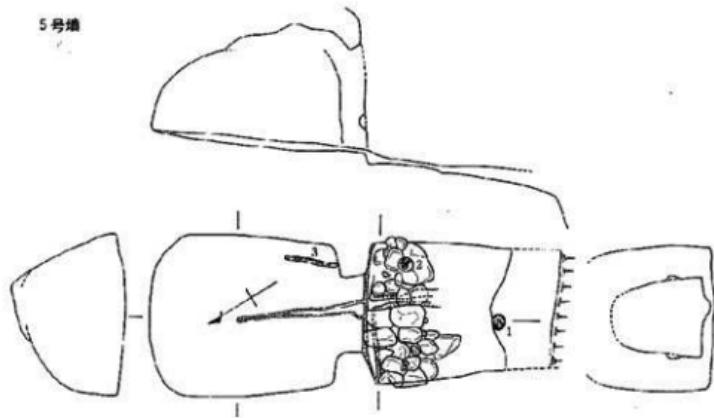
4号墳



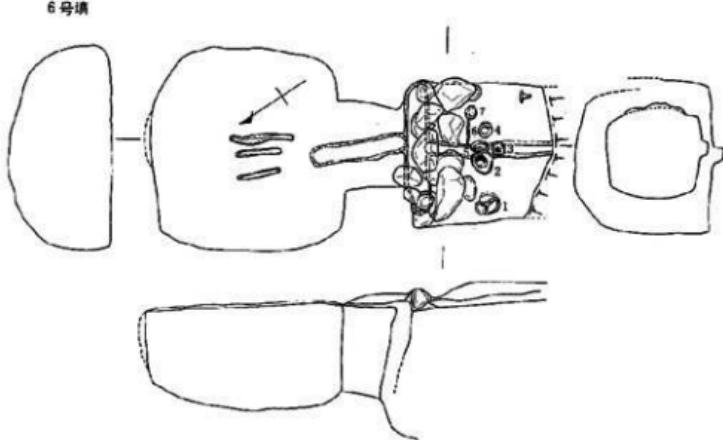
6 1 2 3 m

図4 横穴古墳断面図（その2）

5号墳



6号墳



5号墳 (1、2 环 3、直刀)

6号墳 (6、平瓶 3、長柄器 5、高环)

0 1 2 3 m

図5 横穴古墳実測図（その3）

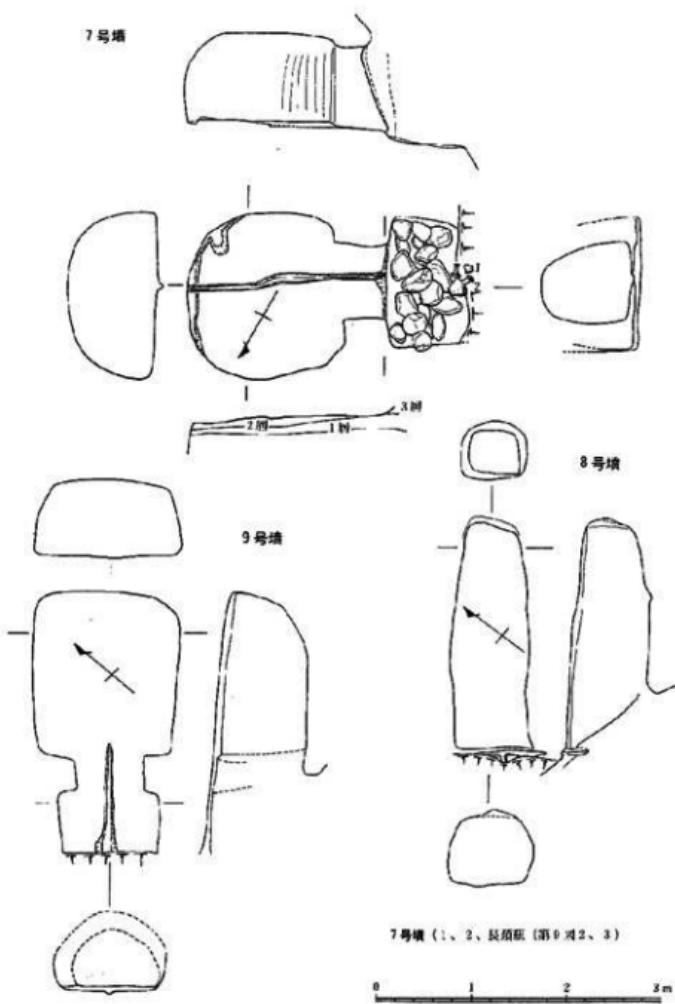
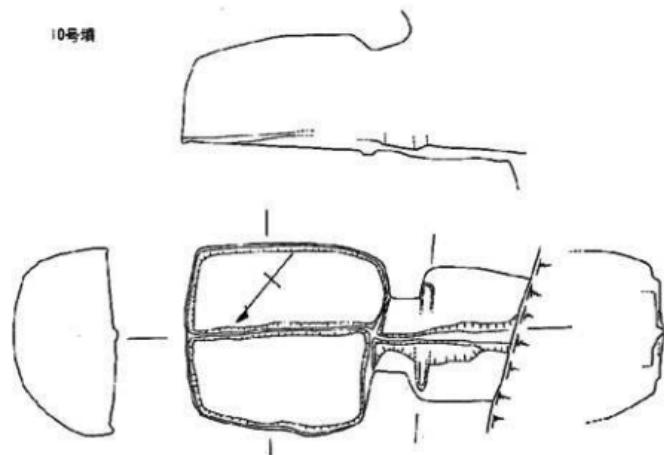
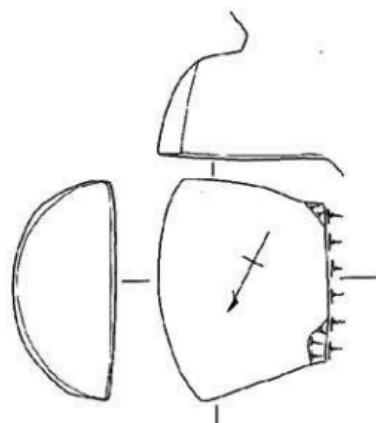


図6 横穴古墳実測図（その4）

10号墳



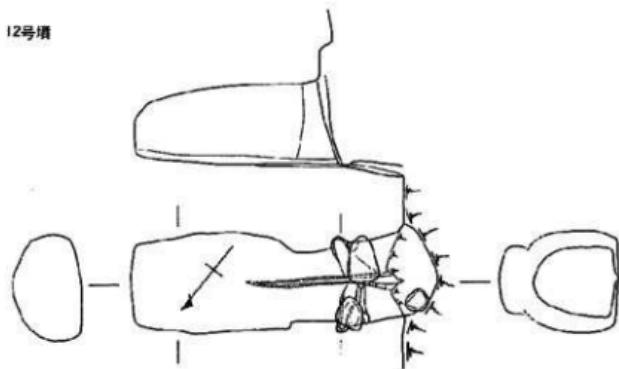
11号墳



0 1 2 3 m

図7 横穴古墳実測図（その5）

12号墳



13号墳

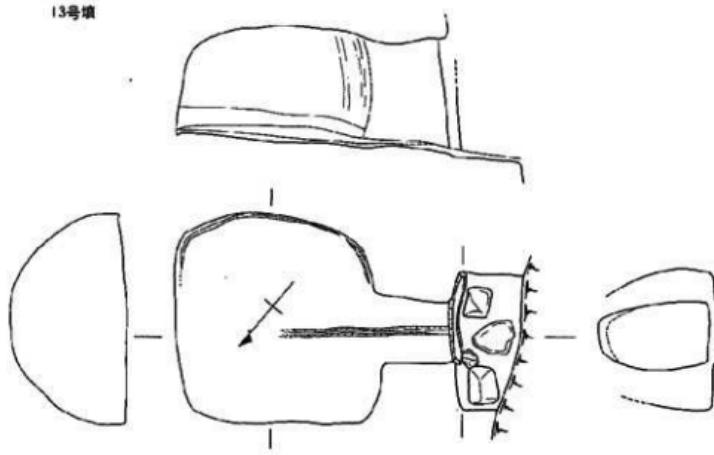


図8 横穴古墳実測図（その6）

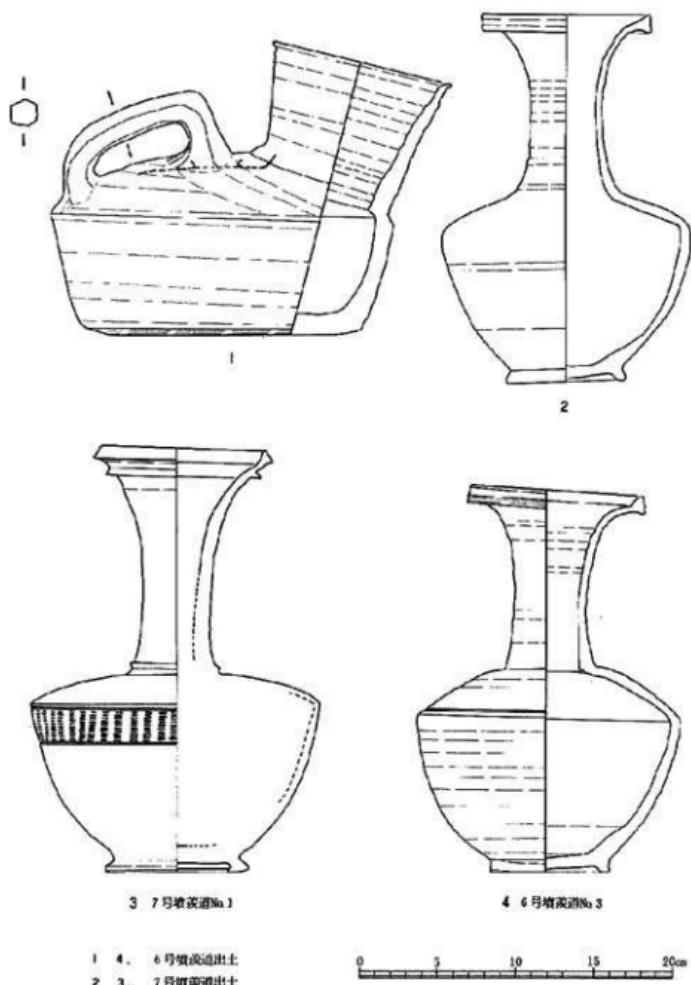


図9 出土遺物実測図（その1 須恵器）

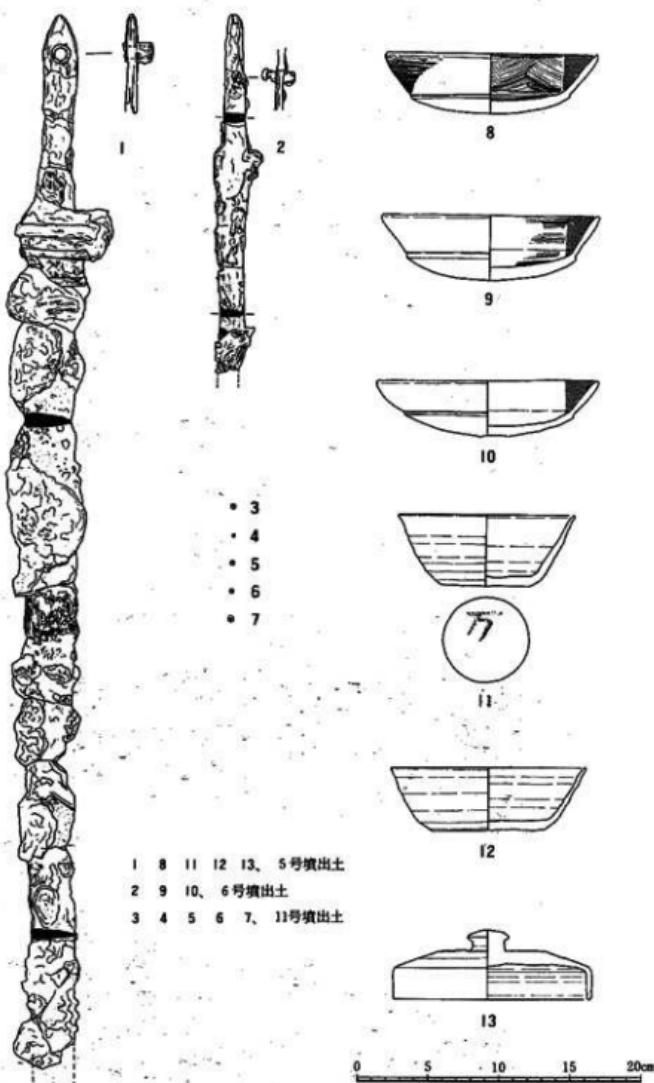
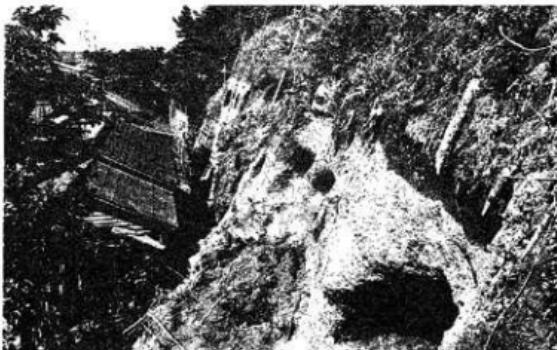


図10 出土遺物実測図（その2）。

写真 1

(1) 配置状況(左から
1, 2, 3, 4, 5, 6,
7, 8, 9, 10, 11号機)



(2) 施設状況(左から
5, 6, 8, 9, 10
号機)



(3) 発振状況



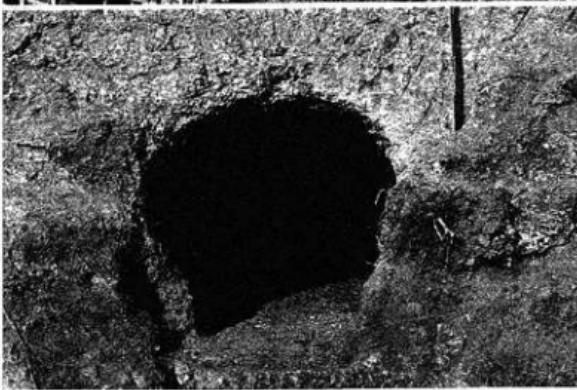


写真 2

(4) 記録状況
(左から4.5.6.
7. 11. 13号坑)



(5) 記録状況
(左から1 - 4
号坑)



[6] 3号坑玄門附近

写真3

(7) 5号墳調査状況



(8) 5号墳玄門の閉
塞石の状況



(9) 5号墳玄門の閉
塞石の復元基盤
の出土状況



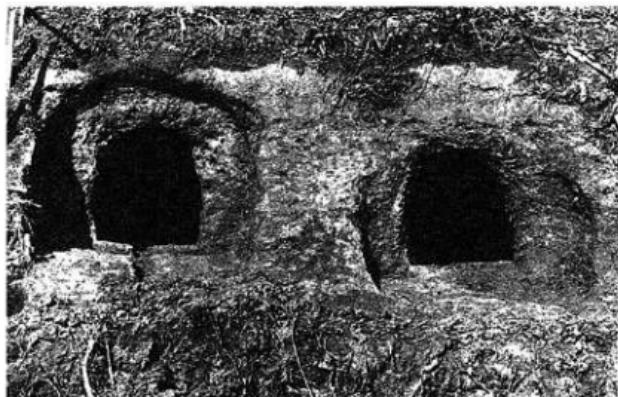


写真 4

30 6、7号墳



31 6号墳調査状況



32 6号墳玄門の閉塞石と遺物の出土状況

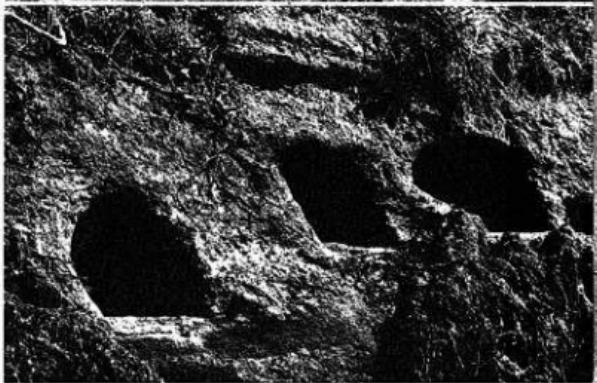
写真 5



03 左から6, 7, 8, 9,
10号墳



04 7号墳通道の遺
物出土状況



05 左から6, 8, 9, 10号墳

写真 6

05 9号墳

06 左から9,10号墳

07 10号墳

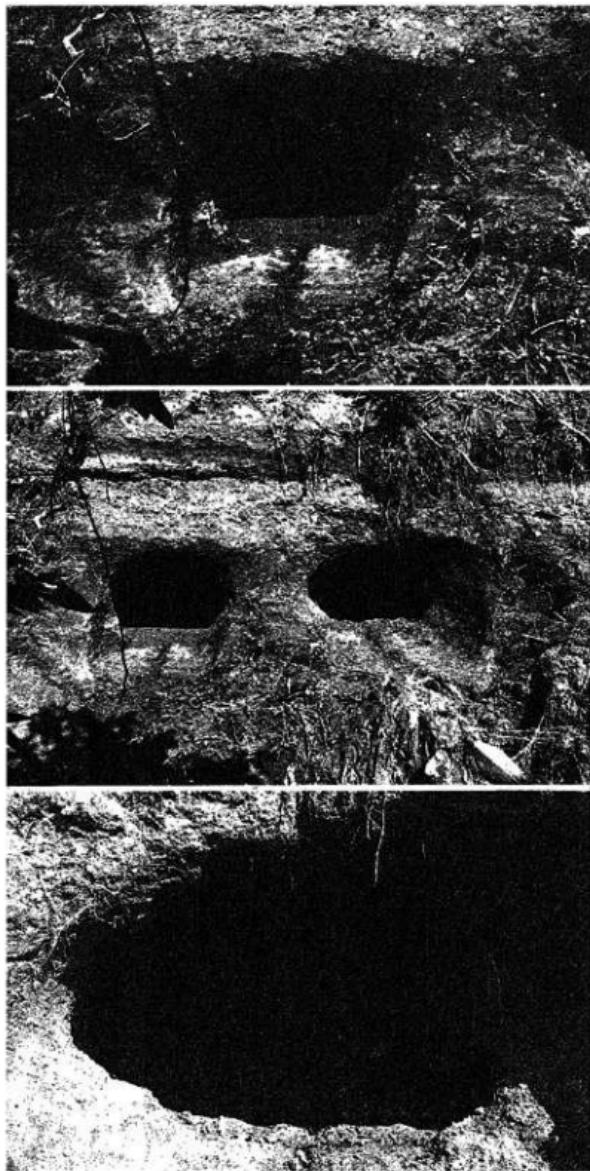
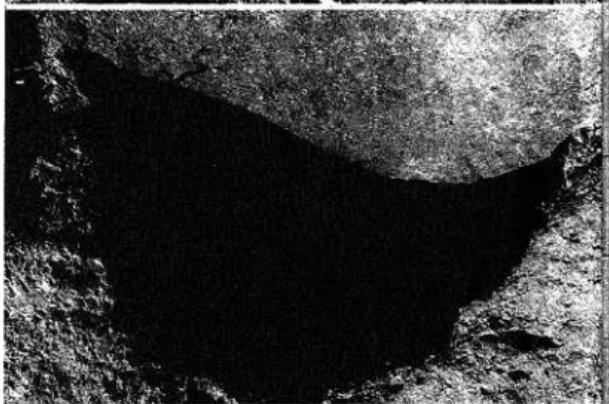


写真7

(a) 左から10.11号墳



(b) 11号墳



(c) 12号墳



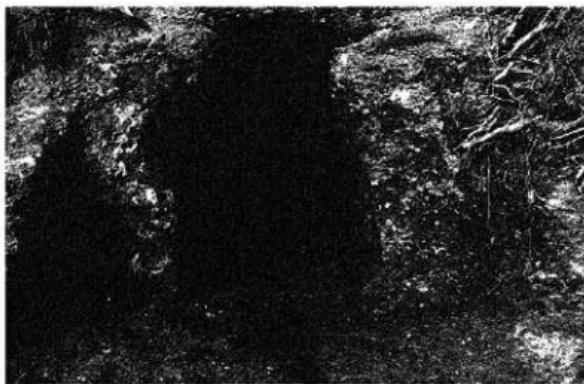
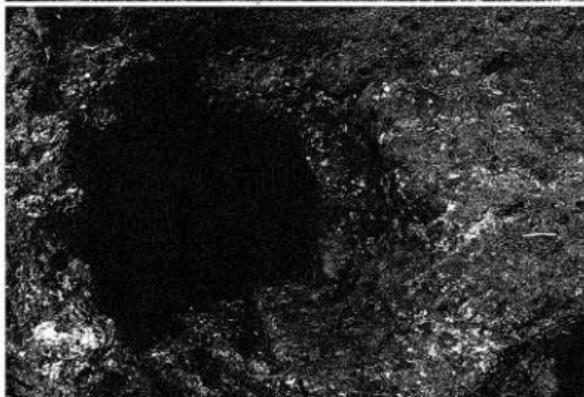


写真 8

㉙ 12号堤



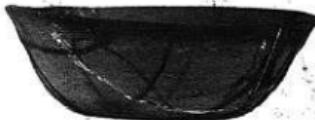
㉚ 13号堤



㉛ 現地説明会風景



(1) 5号墳出土 土師器 壊



(4) 5号墳出土 須恵器 壊



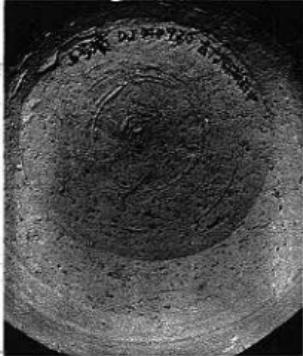
(2) 6号墳出土 土師器 壊



(5) 5号墳出土 須恵器 壊(墨書き土器)



(3) 6号墳出土 土師器 壊



(6) 5号墳出土 須恵器 壊底部「万」の墨書き

写真 9



(1) 6号墳出土 平瓶



(3) 7号墳出土 長頸瓶



(2) 6号墳出土 長頸瓶



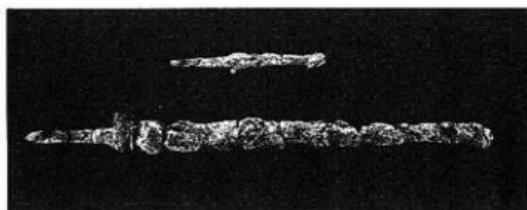
(4) 7号墳出土 長頸瓶



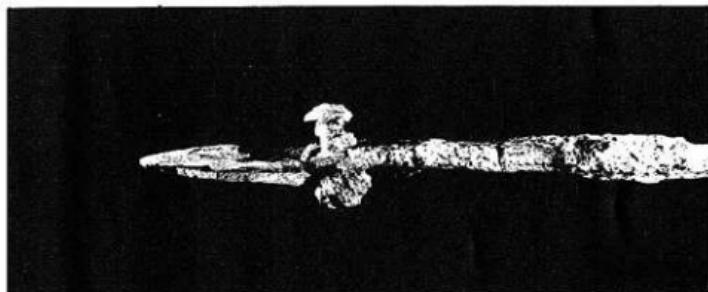
(5) 5号墳出土 盖

写真10

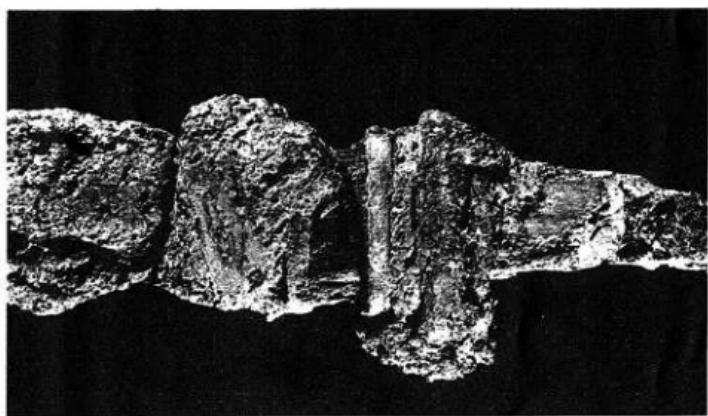
写真11



(1) 刀子(6号墳出土)と直刀(5号墳出土)



(2) 刀子茎の鉄目釘



(3) 直刀 柄木の緑金と蝶口全具